

明大寺の生物自然を思う

元基礎生物学研究所長
元岡崎国立共用研究機構長

岡 田 節 人

ある地域の、ある時点における生物相を記録しておくことは、ある人々にとってはかけがえのない貴重なノスタルジアにもなる。だから、その記録は、客観的なデータであることを越え、至って人間的な情緒と一体化するものでもある。

生物といっても、何から何までに、等しく関心をもつ人は極めて限られている。極めて特殊なグループの生物であっても、そのような記録は、実は人の心に生きるものでもある。一人の人間の生涯であっても、生物へのこうした面への関心は、ときには高揚し、ときには低調となる。

私にとって、ノスタルジアにまで深化できるような関心と呼ぶものは、生物のなかでも主として昆虫類だけに限られる。それも残念なことに私の岡崎時代(1984－91)というのは、生物自然についての関心は、至って低調な時期に当たっていた。

しかし、よくできたもので、生物自然についての関心をもつ偉大な存在を岡崎は欠いていなかった。生理学研究所の大平仁夫名誉技官は、コメツキムシという大きなグループであっても並みの人には何の変哲もない地味で見栄えのしない甲虫の最高の権威者であり、所内の手許に標本類をもっておられたから、時どき見せて頂いては「これは中々に貴重な種類ではありませんか？」などと指摘すると、「流石に、よい眼力ですね。これは珍しいものです」などと褒めて頂いて、嬉しがっていたものだ。そして、自ら採集にも行かなくなっていた私の気分を大いに和ませて頂いたことがあった。

やがて、毛利(元)所長が自らのリーダーシップで、日本の全蝶類のDNAの塩基配列を決める、という壮大なプロジェクトを始められ、これは基生研の事業の一つとなったが、あれよあれよと瞬間に、これを完成されてしまったことに讃嘆するほかはない。基生研の底力というべきであろう。

しかし、これは岡崎の生物自然そのものとは別の話である。岡崎の生物自然について、これも、大平技官が関心を持って注意深く見守っておられたものに、ホタルの仲間があった。岡崎明大寺町の界隈のホタルは、ヒメボタルとかいって、関東にも関西にも見つからないものだった。今も生息し続けているのだろうか？それともとっくに絶滅したのだろうか？

話は跳ぶが、そう言えば、明大寺の辺りには今もタヌキが生存しているのだろうか？タヌキは濱(元)機構長が官舎の庭で発見されて、謂わば「餌付け!？」に成功されたく、親密にお付き合いをされていて、毎日姿を現わしていたと聞く。しかし、近隣の私の官舎宅には寄りついたことはない。これはまさに人間の方の人徳の問題であって、タヌキがよく人格を見抜くことができる、という認知能力の存在を証明する話である。

明大寺の界隈の変貌ぶりはすごい。研究所の発展・充実という大目標の遂行のために、明大寺の丘

は建造物で埋めつくされつつある。タヌキやホタルはどうなっているのだろうか？

研究所の本来の目的とは全く異なるにせよ、ときには“ゆとり”の部分として五年毎ぐらいには明大寺の界隈の生物自然の調査を行ない、元来は豊かであったと思われる生物自然にちょっとした関心を向けるのも、毒にも迷惑にもならないが、それらの蓄積はまたとない、よいノスタルジアともなろう。

以上